努力と予算は相当のものであり、ハーパースフェリーセンターは、その象徴といえる。

ユニガイド・プログラム

ユニガイド・プログラムは、ハーパースフェリーセンターが主導する、米国の国立公園における標識類体系化の取組みである。一九九〇年代に開始され、二〇〇三年に「ユニガイド・サイン基準」（以下、新サイン基準）が策定されている。この新サイン基準では、サインの目的、設置場所、車道、歩道、利用のタイプ（通過型、散策型など）、記述内容などについて、細かくかつ具体的なデザインが示されている。標識のデザインは、フレームの部分と表示面を選択して組み合わせる、いわば「セミオーダー」式の構成になっている。マニュアル本体は、総ページ数が六〇〇ページを超えるという大部なものである。

写真3　シェナンドア国立公園のパークニュース（上）とパンフレット（下）。パンフレットの上端には黒い帯が印刷されている

このサイン基準の特徴のひとつは、前述のユニグリッド・システムで採用されている「ブラックバンド」が標識にも導入されたことだろう。色は黒色ではなく濃緑色であるが、茶色の表示面の上端に、設置者である国立公園局の名称とマークの入った帯（オーバー・バー）がデザインされている。これにより、標識についても印刷物同様に「国立公園局の管理する公園体系」（＝「ナショナルパークシステム」）全体の統一的なアイデンティティーを演出するための基礎が整ったといえる。

なお、国立公園システムを構成する公園地（国立公園ユニット）は、二〇〇四年現在で三八八箇所、うち国立公園は五六箇所である。国立公園以外の国立公園ユニットの多くは都市的な公園であり、かつ、歴史公園、戦跡などの中には規模の小さいものも少なくない。今回のサイン基準は、こうした都市域にある小規模公園地の標識類も対象としていることに留意が必要である。

アプローチ道路との一体整備

日米の国立公園には大きな違いがあるが、そのひとつは道路管理者と公園管理者との関係だろう。両者が基本的に同一である米国の国立公園の入口道路は、公園計画の動線計画の要として設計・整備されている。入口標識はそのような道路計画の重要な構成要素といえる。

新サイン基準に関する紹介記事においても、入口標識は「利用者を歓迎するとともに、これから国立公園局が管理する公園システムの区域に入ることを印象付ける」ものとされている。エントランス道路はまさに公園の表玄関であり、入口標識は公園のランドマークとして機能することが求められる。

対照的に、日本の国立公園や米国の国立野生生物保護区などにおいては、道路管理者と保護区管理者が異なる場合も多く、なかなかそのような施設を設置することは難しい。付帯する駐車スペースがないどころか、標識が道路敷外に設置されていることも少なくない。人が並ぶスペースやカメラの三脚をたてる平坦な場所もなく、写真を撮るにも一苦労である。しかしながら、その公園なり保護区の設立目的が保護に重点を置くものであれば、そのような施設で十分ともいえる。米国の国立公園型の入口標識やエントランス道路は大規模であり、建設のためには相当な費用と土地の改変が伴う。そのため、米国の国立公園型の標識から、デザインや構造だけを模倣しただけでは中途半端な施設になりかねない。このユニガイド・サイン基準を参考にする場合には、このような日本と米国の国立公園管理方針や、それを取りまく状況の違いを念頭においておく必要があるだろう（写真4）。

コスト縮減と新サイン基準

新サイン基準のもうひとつの特徴は、一九八八年の基準と異なり、木材や石材などの天然素材の使用にこだわっていない、という点にある。内容に変更の多い表示面は取替えが可能になっている一方で、台座は長期間の使用に耐えうる材質と構造が選択されている。例えば、材質はアルミニウムのような腐食しにくい金属やコンクリートを用い、木材もレッドウッドなど耐久性の高いものが指定されている。表示面は塗装するか、もしくはシートを貼り付ける仕様が採用されている。このような構造や部品の共通化は、維持管理コストの縮減・合理化にも大きく貢献するだろう。

写真4　ニスクアリー国立野生生物保護区の入口標識。簡素な構造で道路とも離れている

ところで、米国の国立公園管理の特徴のひとつは、充実したメンテナンス組織の存在にあるといえる。大きな公園ユニットでは、土木、建築、電気、機械の専門家がそろっている。維持の手間がかかる木造の構造物や石積、着脱式のピクトグラフの効果的な使用なども、こうした手厚いメンテナンス体制に負うところが大きい。

一方、国立公園局においても、組織の合理化と業務の効率化が進められており、特にメンテナンス組織はその風当たりが強いと言われている。維持管理部門の縮小により、これまで熟練職員により行われてきた管理作業がアウトソーシングされることになる。そのためには、維持管理の内容も外部発注に適したものとなっていることが望ましい。つまり、従来のきめ細やかな「職人芸」に頼るではなく、部品・素材を共通化し、部材や部品の交換で維持管理ができるように見直すことが必要となる。

新しいサインプログラムにおける素材や構造などの根本的な見直しは、このような維持管理体制の縮小と業務のアウトソーシングという組織的な要請とも無関係ではないだろう。

おわりに

日本の入口標識は、デザインや構造の面で米国の標識に類似しているものも多いが、設置位置や設計思想は大きく異なる。日本では、公園名を表示する標識は公園の入口ではなく、公園利用の核心地や展望地点などに設置される例が多い。これは、道路管理者との関係や利用形態の違いなどにも起因している。

一方、日本の古い入口標識の例を見ると、国立公園が設立される以前からの文化やそれに基づく意匠なども豊かなことに気づかされる。特に、日本には石碑の文化があり、初期の公園名の標識には日本独自のすばらしい意匠が見られる。そのような意匠を大切に引き継ぐことも重要なのではないかと思う。また、近年には特定の地域内で意匠が統一された標識整備の例もある。そうしたものの中には、落ち着いた、雰囲気のあるものも少なくない。

地域制公園の入口にふさわしい標識をいかに整備すべきか、という問題はまだ解決されたとはいえない。また、国立公園の利用が団体旅行から自家用車を主体とした個人旅行に移行しつつあることも、標識のデザインに影響を与えるはずである。公共事業費の縮減により、建設費や維持管理費の抑制に対する要請も高まりつつある。その一方で、日本らしい国立公園のアイデンティティーを伝えるような標識のあり方というのも問われているのではないだろうか。米国の新サイン基準は、さまざまな点で新しい考え方が導入され、思い切った見直しがなされている。日米の国立公園は、その成り立ちや施設の設計思想にさまざまな相違点があるものの、このサイン基準は、今後の日本の国立公園における標識類のあり方を検討する上で、大変参考になるものと思われる。

《参考図書》
・ハーパースウェリーセンター：ユニガイド・サイン・プログラムウェブサイト
http://www.nps.gov/hfc/products/uniguide.htm
・NPS Identity 1, Summer 2004; Office of NPS Identity, Harpers Ferry Center, National Park Service, U.S. Department of the Interior
・Park and Recreation Structures; United States Department of the Interior and National Park Service, 1938

鈴木　渉●すずき　わたる
平成六年環境庁（当時）採用。平成一五年三月よりＪＩＣＡ海外長期研修制度により二年間、米国の国立公園局及び魚類野生生物局において研修。平成一九年四月より現職。